自決用青酸カリ 肌身離さず

シベリア抑留女性 市川輝子さん(岡山)証言

終戦76年 凄惨な実態生々しく

女性抑留 歴史に光を

2021年８月15日付　山陽新聞

ぼくの８月15日

倉敷市・万寿東小６年　森　亮

「今日は何の日でしょう。」と八月十五日に父が新聞を読みながらぼくに質問してきた。「何の日だったかな。」とぼくはすぐに答えられなかったので、ウェブ検さくをしてみた。すると、パナマ運河開通の日と終戦の日、などといろいろな日が出てきた。その後母が「終戦の日よ。」と教えてくれた。そういえば塾や学校の六年生の教科書に「八月十五日に昭和天皇が玉音放送で日本の降伏を国民に伝えた。」とあったのを思い出した。日本は戦争をしたが降伏した日は負けた日なのになぜ終戦記念日なのだろうと思った。すると父が読んでいた新聞を見せてくれたのがこの記事であった。

　第二次世界大戦後、旧ソ連により収容所へ送られ二年間シベリアに抑留された元看護師の女性の証言をまとめた内容だった。抑留され重労働を課せられた当時の情報が手にとるように分かる記事だった。「シベリアでも、岡山でも、戦争は不幸しか生まなかった。」「もう二度と誰も私たちのような目に遭わせてはいけない。」という言葉が心に残った。ぼくは戦争は遠く昔の出来事のように感じていたが、今後も絶対に戦争がないとも限らない、戦争のことを知らないぼく達のような世代が中心の社会になるからこそ、戦争のことを知らないといけない、と思う。

　ぼくに出来ることは何だろうと考えた。一つは八月十五日という日を忘れないことだ。来年のカレンダーに終戦の日と書きこんだ。そして両親の話を聞いてみると、母の祖父母は広島の原爆被爆者であり、父の祖父はシベリア抑留者であったことを知り、ぼくは戦争に無関係ではないことに気づいた。そして最後にこのことを忘れないために今回記事を作文にまとめた。

　これが、ぼくの八月十五日である。

(C)山陽新聞社　無断複製・転載を禁じます。